学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	橋本　萌 【人間発達科学専攻　平成23年度生】	本研究は、1930 年代東京市において実施された伊勢神宮参拝を主目的とした小学校児童の修学旅行（以下、参宮旅行）を対象に、拡大から終焉までを構造的に把握し、加えて参宮旅行の実践から教育的意味を分析することをもって天皇制と教育の関係にかかわる一側面を解明しようとするものである。東京市では伊勢神宮より離れた地域にありながら、国民教育を担う初等教育機関で卒業学年児童全員を対象として参宮旅行を拡大させた。こうした現象の実態をとらえ、教育史研究として位置付けた。 第一部では東京市における参宮旅行拡大の構造的な要因を検討した。まず、各区や各区教育会が区内の小学校を連合して参宮旅行を実施するシステムを形成し、費用的な補助を行った。各区は、卒業学年全児童を対象に、貧困を理由とした不参加児童を減らすための特別な補助を行った。伊勢神宮参拝を含む参宮旅行だからこそ、慈恵的な費用補助がなされたといえる。そして終には、鉄道運賃の割引を国に希求し、教育会を中心に東京市内各区においても運動がおきた。1937 年には鉄道省により「小学校児童団体伊勢神宮参拝ノ為旅行スル場合ノ取扱方」が告示され、国民精神総動員運動の一施策として位置づけられ、推奨された。これにより更なる拡大を遂げることになるのだが、戦局の悪化に伴う鉄道輸送の困難により、1937 年には規制が始まった。最後の実施となった 1942 年には、東京市が参宮旅行を主催し、費用的な補助を担った。 第二部では、急激な拡大を遂げた参宮旅行を教育的意味から分析することで実態を検証した。①なぜ伊勢神宮へいくのかという、参宮旅行独自の目的について、東京市では参宮旅行は「訓育」における「六ヵ年教育の最後の仕上げ」という位置づけであった。神社参拝が日常化していく中で、伊勢神宮参拝を含む参宮旅行は特別なものと受け止められた。②参宮旅行の学習内容については、「旅行」特有の事象を生かして地理や歴史、綴方などが教科横断的に取り組まれた。ただ、こうした学習が一般化していたとはいえない。知識的な学習よりも、実際に参拝すること＝体験することの方が、重視されたと考えられる。③学習の方法としては「話合」、「協議」、「研究」といった児童の活動や発表の機会が設けられ、新教育の手法が活用された事例が確認できた。
論 文 題 目	1930 年代東京市における 小学校児童の参宮旅行の研究	
審 査 委 員	（主査）　教授　米田　俊彦	
	教授　池田　全之	
	准教授　冨士原　紀絵	
	教授　小玉　亮子	
	教授　清水　康幸	